（いやだ･･･飛び出しちゃう･･･）

瞳と幸恵に授業前にまたピンポン球を入れられた。膣と腸内に白いピンポン球を納められたまま、敬子は生徒達の前に立たされた。生徒たちの敬子に向ける視線はいつもの通りの視線だろうか･･･教師に向けるいくつもの視線･･･敬子は生徒たちの視線を気にしないようにした。でも、どうしても気になってしまう。視線が異物を入れられた下半身に集中しているようで怖いのだ。異物を膣穴に２個、直腸に４個呑み込んでいる女教師の動きは、悟られているのではないか。それに、敬子の顔は熱く火照っている。前後の異物が不意に胎内でうごめいて、その刺激で感じてしまっているのだ。顔は上気して、淫らな表情を化粧の下から滲ませているのではないか。不安感が敬子を襲い、いつものように生徒たちをまともに見ることができない。通常の授業をしなければと思うほどにぎこちなくなるのだ。

「先生の話を聞いているの！」

思わず大きな声を上げてしまった。ひそひそと隣同士で話している二人の女子生徒は、自分のことを話題にしているのではないかと心配になり、思わず声を荒げてしまったのだ。敬子の強い口調

に教室の生徒たちが注目した。敬子の衣服の下でじっとりと汗が滲んでいる。体は火照っており、異物はさらに敬子を刺激してきた。

　英語を担当している敬子は、教科書を読み、生徒を指名し、黒板にチョークを走らせた。教壇の前で生徒に説明していると、膣内のピンポン球が、また不用意な動きをした。教室に響く凛とした声を出すために腹部に力を入れたことで、ピンポン球が粘膜をこすりながら動いたのだ。敬子を見つめる生徒達の前では普段通りでいなければならない。異物を前後の穴に呑み込んでいることなど、決して知られてはならないことだ。声はうわずっていないだろうか。顔は赤らんではいないだろうか。生徒達は自分の微妙な変化に気づいていないだろうか。だが確かめるすべはない。生徒の視線が突き刺さってくる。いや、絡みついてくる。それはいつもの視線であり、意識しすぎなのだろうか。わからない。すでに自分を見失っているのかもしれない。目の前の生徒たちは、すべてを知っているぞ。なんて破廉恥な女教師だ。ピンポン玉を膣穴と直腸に入れ、性的に感じながら授業をしている淫乱教師だと思っているのではないか。敬子の思考は飛躍していく。

胸中では不安感にさいなまれながらも、英文の文法についての説明を続けなければならない。落ち着いて説明することに集中した。でも、直腸内にぎっしり詰められているピンポン玉と膣内のピンポン球は薄い粘膜を両側から擦りあげてくる。敬子の肉体を内部からとろけさせてくるのだ。敬子を切ない思いにさせてしまう。前後に入れられたピンポン球の動きが敬子を性的に高ぶらせていた。

教室の中央に座っている瞳と視線があった。瞳は柔らかい表情で笑っていた。瞳の隣の席に座っている幸恵もほおづえをつきながら見つめている。その表情には笑みがこぼれていた。敬子の顔が、さらにかっと熱くなる。二人は敬子が感じてしまっていることを笑っているのだろうか？授業中にあそこと後ろの穴に異物を入れ、感じながら生徒達の前に立っている姿を笑っているのだろうか？淫らな敬子を笑っているに違いない。平然さを取り繕いながら授業をしている教師の惨めな姿を笑っているのに違いない。顔から火が出るほど熱くなっている。きっと顔は赤くなっている。それを生徒たちは見つめているのだ。教科書に目を落としたまま顔を上げることができない。あ、今の声･･･うわずっている･･･頭

が真っ白になっていく･･･いつものように落ち着いた声で説明しなくては･･･ああ、どうしよう･･･ピンポン球で感じちゃう･･･

敬子は無意識に内股を引き締めていた。

（いやだ･･･落ちちゃう･･･）

内股を引き締めたため、膣内のピンポン球が膣口付近まで下がってきたのだ。膣内から飛び出したピンポン球がもし落ちたら･･･今日はストッキングもパンティもはかせてもらっていない。授業前にストッキングもパンティも脱がされていた。だから、膣口をすり抜けたピンポン球は、床をはねて転がってしまうだろう。軽い音をさせながら生徒たちの座っている席にコンコンコンとはずんで転がるだろう。ピンポン球がどこから飛び出たか、気づかれてしまう･･･ポケットから落ちたとごまかせるだろうか。一人や二人ならごまかすことができるかもしれない。でも教室中の生徒の視線が説明している敬子に向いているのだ。スカートの中からピンポン球が落下したことを見られるにちがいない。なぜスカートの中からピンポン球が落下したのか･･･生徒達はなんて思うだろう。それに･･･ピンポン球はきっと私の体液で濡れている。ひどく濡れているに違いない。恥ずかしい体液はもう膣口のあたりまで湿ら

せている。股間が濡れていることが分かるのだ。だからピンポン玉はさらに滑りやすくなって今にも膣を飛び出して教室の床に転がってしまいそうなのだ。生徒の目に触れたピンポン玉の表面は、私の愛液で濡れ光っているだろう･･･考えただけでも恥ずかしく、そして怖ろしい。絶対に落とすわけにはいかない。絶対に知られてはいけない女教師と二人の女子生徒との間の秘密なのだ。

　そろりと教卓の後ろに向かった。へっぴり腰になっていないだろうか。もう膣の入り口にまで下がってきていた。慎重に歩かなくては落としてしまう。教卓の後ろにやっと移動できた。冷や汗で背中がしっとりと湿っている。スカートの上から片手で股間を押さえた。教卓の陰になっていて生徒からは見えないが、腕の動きが不自然になってはいけない。大胆な動きはできない。

（だめ、ピンポン球を押し込むには、指で押し込まなくっちゃだめ･･･直接じゃないと無理･･･）

「じゃあ、教科書４５ページの英文をノートに写しなさい」

唐突な指示をした。なぜ教科書の英文をこの場面で写すのかといった生徒の戸惑いを感じさせる空気が流れた。教卓の後ろに立って生徒を一瞥した。生徒達がノートに鉛筆を走らせ始めた。静か

な教室に鉛筆とノートの摩擦音だけが聞こえる。生徒たちの顔はノートに向かい、頭だけが見える。ただ二人をのぞいて･･･瞳と幸恵だけがノートに向かわず敬子を見てにっこりと笑っていた。

　二人に見つめられながら、ゆっくりとスカートのすその中に手をすべり込ませた。